器楽（室内楽を含む）

渡辺 和

2020年春前に始まり足かけ３年程も続いたコロナ禍の非常事態を脱し，日本の音楽界はある程度の落ち着きを取り戻したかにも見える2024年。とはいえ，コロナ禍後の世界規模での政治経済情報システムの急激な流動化は，個人小規模ヴェンチャー・ビジネスたる器楽室内楽界に否応なく変化を齎している。

◆石田泰尚という新時代のカリスマ

2024年室内楽界最大の驚きは，石田泰尚の人気沸騰であろう。アクが強い風貌とステージマナーながらボウイングの巧みさを高く評価される室内楽専門家，というイメージだったこの中堅ヴァイオリニストは，３年ぶりに『音楽の友』誌が開催した「あなたが選ぶクラシック・ベストテン2024」各部門で圧倒的な支持を得る。月刊音楽誌を購入する愛好家層に最もアピールし，コンサートマスターに座る神奈川フィル，石田が率いる弦楽アンサンブル「石田組」，YAMATO弦楽四重奏団らまでが各ジャンルで上位を独占した「石田現象」は，評論家や音楽関係者の想像を絶する事態だった。

石田の活動で評価すべきは，室内アンサンブルの伝統的フォーマットを用いつつ，新たな客層の開拓を成し得た点にある。カリスマティックなコワモテ風リーダーが，クィーンやローリング・ストーンズ，モリコーネなどロックや映画音楽から，グリーグ，バルトーク，シベリウス，ホルストなど近現代のモダン楽器弦楽合奏レパートリーを高い水準で披露する舞台は，旧来の音楽ファンばかりか「クラシックは真面目で堅苦しい」と感じていた層にも大いにアピールする。

アンサンブルとしての「石田組」のライヴ活動は，基本的にはライヴハウスでのインディーズ型自主公演の延長にある。敢えて旧来の大手クラシック音楽事務所は介さず，アリーナ型公演の実績に富むポピュラー系事務所に大規模公演やツアー差配を委託。「石田組」10周年記念ツアーも，11月10日の日本武道館公演を頂点に，各地の公共ホール自主公演や旧労音型鑑賞団体，更には12月22日の福岡県築上町文化会館コマーレでの地元ボランティア実行委員会など，様々な規模と性格の主催団体を広く網羅。旧来の室内楽団体が出来なかった広がりを見せている。その活動が弦楽合奏団の未来を開くのか，今後も注視が必要だろう。

◆若手の活発な活動と外国人演奏家の新たな動向

石田に続けとばかりにコロナ禍以降の器楽室内楽界で大活躍なのは，若手男子ピアニスト達である。ドイツグラモフォンとの国際専属契約を結んだ辻井伸行や，ヴェルビエ音楽祭やBBCプロムスに参加した藤田真央を筆頭に，指揮者や室内管監督としての活動も含め多面的な才能を伸ばしている反田恭平らは，今や日本を代表するトップアーティストとなりつつある。

コロナ禍でのSNS展開から旧来型メディアを経由せずに人気を博すようになった角野隼斗，インターネットでのコンクール中継で注目を浴び固定ファンを作り上げた務川慧悟，阪田知樹，亀井聖矢ら，20代から30代前半の若手男性ピアニストの集客力は圧倒的で，中小規模ホールでのリサイタルは発売と同時にチケットは完売。地方公演にも所謂追っかけファンが押し寄せる。一部に顔を顰めるオールドファンもあろうこのような現象が，2010年代半ば以降の器楽室内楽会場の小規模サロン化とクラシック若手演奏家の「会いに行けるアイドル」化現象が，SNSを用いた情報発信側にファンを取り込む「推し活」へと進化した結果であることを認めないわけにはいくまい。

とはいえ，こんな現実がシリアス・ミュージックのポピュラー化に向かうばかりとは限らないのは興味深い。演奏家の魅力に惹かれコンサート会場にきた新しいファンは，20世紀後半やそれ以降に開拓されたレパートリーへの抵抗が極めて少ないのである。12月12日に藤田真央がサントリー大ホールで開催したソロリサイタルでは，ショパンの同名作品と共に矢代秋雄《24の前奏曲》全曲が披露され，喝采を博した。今や若手室内アンサンブルトップとなった葵トリオも，シュニトケ，細川俊夫，藤倉大，ヴァインベルクらの演目を並べ，チケットは発売直後に完売している（12月17日東京オペラシティ，21日ザ・フェニックスホール）。東京文化会館館長となった野平一郎がプロデュースした新しい音楽祭「フェスティヴァル・ランタンポレル」では，務川慧悟がモダンと時代ピアノを用いラッヘンマンとシューベルトを弾き分けるリサイタルが満員となる（11月30日東京文化会館小ホール）。こんな現象をどのように利用するか，主催者や現代音楽界の力量が問われる。

若手世代の目覚ましい活躍に比べると，中堅世代の活動の難しさは構造的なのかも。室内楽界でも，前述の葵トリオを筆頭に，５月にベルリンのピエール・ブーレーズ・ザール演奏会に招聘されたカルテット・アマービレ，メンバー交代を経て北米拠点の活動に本腰を入れ始めたクァルテット・インテグラ，大阪国際室内楽コンクール第２位以降国内拠点の俊英として期待を集めるほのカルテット，大阪大会特別賞でボルドー国際弦楽四重奏音楽祭に派遣されたタレイアQ，等々，若手弦楽四重奏団の活発な活動が目を惹く。中堅に差し掛かりつつあるウェールズQがサントリー・チェンバーミュージック・ガーデン恒例のベートーヴェン弦楽四重奏全曲演奏に抜擢され，際立って個性的な解釈を貫きコアな室内楽愛好家の間で賛否両論となったのは，主催側の勇気も賞すべきか（６月８，９，11，12，13，15サントリーブルーローズ）。

バブル期前の水準まで下落した日本円の価値を反映し，旧来型の著名外国奏者リサイタルや室内楽は存在感を弱めている。だが逆に円安や治安の良さ故に，日本に長期滞在し活動を行う著名外国人演奏家の事例もある。クラリネットのリチャード・ストルツマンが九州に長期滞在し日本公演を行い（９月24日浜離宮朝日ホール，10月６日竹田市総合文化ホール），千葉の流山では定住したピアノのパスカル・ドゥヴァイヨン夫妻が監督となり近郊都市型ホールの指定管理者による音楽祭「NAGAREYAMA国際室内楽音楽祭2024 」（11月２～４日スターツおおたかの森ホール）を展開している。

勿論，20世紀型のスターシステムがなくなったわけではない。新人としては，欧州弦楽四重奏界の21世紀中葉を担うと評価が高いレオンコロQが満を持して日本に登場，実力の一端を示した。また，昨年の大阪国際室内楽コンクールが発掘したピアノ四重奏団カピバラP・Qが秋に日本ツアーを行い，未だ未開拓なこのジャンルに新しい風を吹き込む期待が高まっている。

渡辺 和（わたなべ・やわら）

宗教音楽，室内楽を中心に，演奏会プログラム執筆，音楽芸術エッセイ執筆，演奏家インタビュー，翻訳，通訳など，フリー音楽ジャーナリストとして活動。コンクール，音楽祭，シンポジウムなど，海外取材多数。国際基督教大学大学院比較文化研究化修士課程修了（比較宗教表現論専攻）。1957年千葉県生。コロナ禍以降，東京と大分の二拠点生活中。主な著書：クァルテットの名曲名演奏（音楽之友社），ゆふいん音楽祭35年の夏（木星社），クラシックホールをつくる，続ける（水曜社）